

余は夢を見たり。

その町は東京都心の一角にあり、眼前の緩やかなる斜面をとどこころに低層の集合住宅を交へながら戸建の家隙間なく覆ひ、各々の小さき庭の木々若葉を擴げ切るに、町全體となるや季節を謳ふが如く綠豊かに映ゆ。懐かしき風景なり。ここに見ゆる風景は前回見たる夢と同じにて、その季節もまた變はることなし。

斜面に縦横に交錯する道は車道と言へども二臺の車がやうやうすれ違ひ得るほどにて、左側に見ゆる稜線を向かう側へと越ゆるバス通りのみが公道なりや。意識はバス通りより右に分かれ斜面半ばを水平に走れる道を進み、最初の角にて左に折れ、ゆるゆると上がり行けばかつてひと部屋を借りて住みたる家そこに現る。さらに意識を集中すれば、玄關を過ぎ、廊下を通り、往時に變らぬ我が部屋の佇まひの中に身を置く自分あり。我に返りて、再び斜面を正面に俯瞰する位置に立つ。町並みを過ぎさらに右へ右へと意識を向くれば、また新たな風景續けり。そも繪描きならば、いづこに立ちてこの風景を描寫したりや、その位置をバス通りよりいか程、いづれの高さにて、斜面よりいか程離れたりやと必ず説明を求むらん。しかり、余いづくにも立ちたる點なく、宙にありやと問はるれば、さなりともさならずとも返答に窮するばかりなり。

バス通りに目を向けたり。登り切らばその向かうに上原と名付くこと相應しき平坦なる土地の擴がりありて、鐵道の小さき驛が見ゆるはずなり。かく思ふ途端にバス通りをさつと上がり、坂上の稜線を越えたる向かう側すぐのところを左側に行けば、そこにもかつて部屋を借りたる家あり。葛がまばらに壁のそこかしこに絡まる古きモルタル造りの家もそのままなれば、中に入りてみれば部屋の中また家の周辺の情景も以前のままなり。以前のままといふからには、先にここを訪れたるはいづれの時なりや。この綠豊かなる風景はその時そのままにてあれば五月ばかりのことなりや。いづれ眼前に擴がる景色はその時のままなり、再び夢見る今がすなはち五月と言ふにはあらず。

懐かしさ溢るる氣持ち抑へ難く、視點を次々に變へたり。こなたにてかやうなることあり、かなたにてさやうなることありとひとつひとつに捨てがたき思ひ出を殘せるが如くなるも、言葉に表はし得る具體的な表象は持ち得ず、カメラに寫すこともさらに叶はじ。夢の中には徘徊する要無し。意識すればズームレンズを用ゐたるが如くに風景の一部擴大もする、かたや移動式カメラの如くにいづくにも即座に入り込む。風景を意識すればそこにあり、意識の對象より外せばたちまちにして消え去るのみ。

夢の中にも自らは自らとしてあり、明確に經驗として記憶に残りたり。ゆゑにこの世に記録として書き遺すを得るなり。記憶に残らぬ現實世界の現もあり、はたまた記憶に残る夢もあり。しからば、此の世もまた夢なりや。

(平成三十年十月十六日受附)